



アユとともに生きる 地域づくり宣言!

概要版



四万十町四万十川保全活用基本計画

「アユとともに生きる地域づくり宣言!」とは、天然アユの群れを育む四万十川を守り、よりよく活かし、川とともにある私たちの暮らしをいっそう豊かにするための四万十町の意味表明です。
本計画に示す将来像をたくさんの方々と共有しつつ、今できることから取り組み、町から流域へ、全国へ発信していきたいとの思いを込めました。



高知県四万十町
<http://www.town.shimanto.lg.jp/>
2018年5月

私たちの身近にある四万十川は今、水量の減少や濁り、瀬や淵の劣化など、自然の美しさ、豊かさが失われつつあります。アユなどの水産資源は激減し、川漁の存続も危ぶまれ、さらに川が暮らしから遠ざかり、川と共生する暮らしの文化も忘れられようとしています。

こうした状況を改善していくためには、人々が現状を正しく認識し、課題を共有するとともに、それぞれの立場から担える役割を確実に果たしていく必要があります。町においても、四万十川の保全・活用のためのより総合的な施策として推し進めていきたいと考えています。

以上の背景から、町では2015~2017年度の3年間、四万十川中上流域のアユ資源とアユ漁の現状把握を中心とした調査等を行い、これからの四万十川の保全と活用の基本的な指針となる計画を策定しました。

四万十川の5つの特徴

四万十川の特徴は、以下の5つにまとめられます。

四国を代表する美しい大河

津野町の不入山を源流とする、幹線流路196km(四国第一位)、流域面積2,186km²(四国第二位)の一級河川。勾配が緩やかで、瀬と淵、手つかずの水際と河畔林が残る自然度の高い川です。四万十町では国道381号の道路擁壁が張り出した区間や、ダム等の影響で水の少ない区間があるものの、川の自然環境は比較的良好といえます。



伝統的な川漁

アユ漁は特に盛んで、友釣り、しゃくり、投げ網、火振り漁など、漁法は様々です。漁期には町内外から遊漁者(友釣り客)が訪れるなど、四万十川の天然アユは、「日本最後の清流」を代表するブランド品としての地位を築いています。



川と暮らす風景

瀬や淵、岩場などの名前が数多く受け継がれ、川と関わる暮らしの文化が豊かな証といえます。川での遊び・学び、祭事も盛んで、両岸の集落を結ぶ沈下橋は、生活橋、親水橋として暮らしに欠かせない存在です。

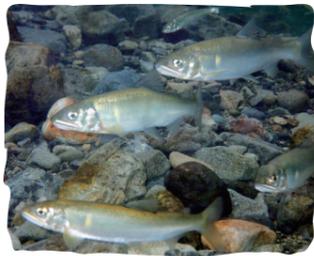


代表的な観光資源

例年、春から秋にかけてたくさんの観光客が訪れます。美しい風景を眺めるだけでなく、水遊び、キャンプのほか、カヤック、ラフティング、川舟下りなどの多様なアクティビティを楽しめます。

豊かな生態系

確認されている魚種は185種を数え、全国最多。豊かな生態系が育まれ、アユ、ウナギ、モクスガニ(ツガニ)、テナガエビ、コイ、ウグイなど、水産資源として利用可能な生物も生息しています。



地域づくりのシンボル・アユ

四万十川を保全・活用した地域づくりに向け、以下の3つの理由から、アユをシンボルとすることがふさわしいといえます。

川の自然環境・生態系の健全性を表す



アユは河口から上流まで、川の環境を広く使って一生を過ごします。そのため、豊かで清浄な水、障害物がないこと、瀬と淵、餌となるコケの生育や産卵に必要な石や砂利などの条件が欠かせません。これらがそろった環境は他の水生生物の生息にも適していることから、アユは川の自然環境・生態系の健全性の指標となります。

四万十川との関わりや関心度を表す



アユ資源の回復のためには、川の自然環境の改善に加え、アユを獲り過ぎないなど、様々な立場からの取組と流域での協力が求められます。また、そうした取組の動向に関心を持ち、川の自然環境やアユ資源の推移を見守る人々の存在も重要です。アユ資源の回復状況は、人々の関心度を表す目安にもなります。

川を活かした地域づくりの拠りどころ・目標になる



天然アユが豊富な四万十川は、ブランドイメージをいっそう高めたい。リピーターが増え、飲食や宿泊などのサービス利用が促されれば、地域の経済循環が活発化します。このように、アユを守り活かすことは、よりたくさんの、より多様な人々が参加できる地域づくりの拠りどころとなり、目標にもなります。

計画の目的

町民・四万十川に関わる様々な主体の共通の指針づくり

① 四万十川・川を取り巻く現状と課題の共有

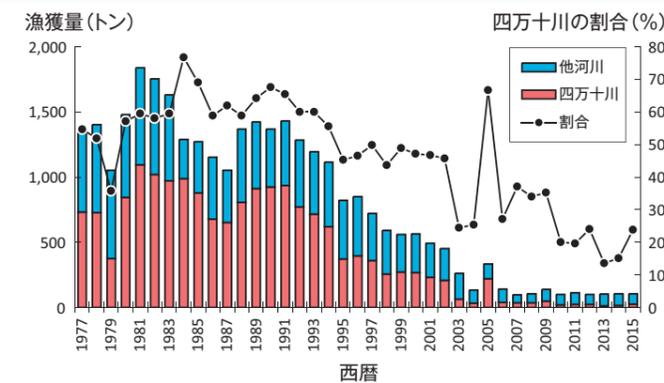
② 川の環境・水産資源・川漁・暮らし・観光の姿(将来像)と保全・活用の基本方針

③ 将来像の実現に向けた取組とその進め方・推進体制

四万十町のアユ資源は今

漁獲量

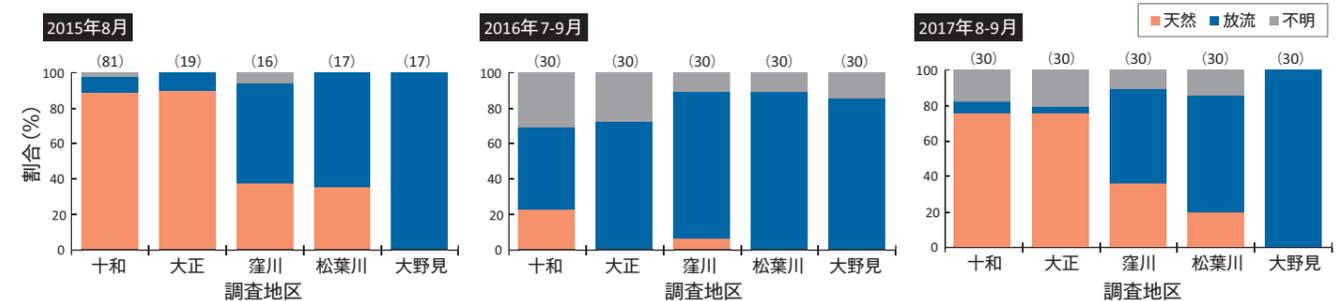
1990年代半ばまでの四万十川のアユ漁獲量は、600トン超。高知県全体の6割以上を占め、全国一位となることも珍しくありませんでした。ところが、それ以降は漁獲量が減り、2010年以降はかつての2割前後で推移しています。県内の他の河川では漁獲量が比較的安定していることから、漁獲量の激減には四万十川特有の要因があるのではないかと考えられています。



資料: 高知農林水産統計年報および農林水産省HP

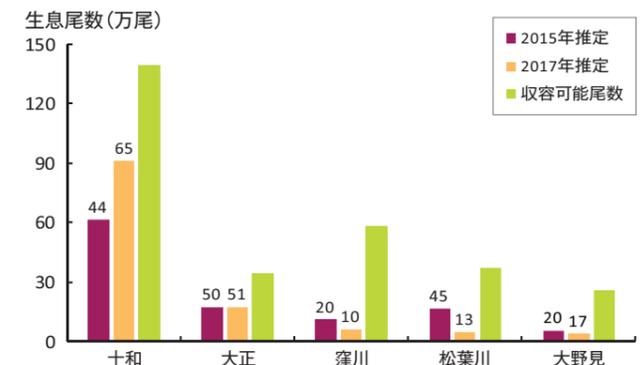
天然・放流の由来

十和~大野見で、アユの生息密度調査、天然・放流の由来判定を行ったところ、十和・大正地区の生息密度が高かった2015年、2017年には、窪川・松葉川地区でも2~4割程度のアユが天然と推定されました。アユが多い年は天然の割合が高く、その分布範囲も松葉川地区まで広がるのがわかり、四万十川のアユ資源は天然遡上の数に左右されていることがうかがえました。



収容可能尾数と推定生息尾数

四万十川の十和~大野見の水面面積を計測し、これに2015年、2017年のアユ生息密度を乗じて区間別の「推定生息尾数」を求めました。これを水面面積に見合った「収容可能尾数」と比較すると、推定生息尾数は収容可能尾数より少ないことがわかりました(十和と大正で50%前後、窪川~大野見で概ね20%)。四万十川中上流域は300~600万尾のアユを十分収容でき、相当な経済効果も期待されますが、近年の生息尾数は多くても140万尾程度に留まっており、現状では四万十川の生産力が十分活かされていないといえます。

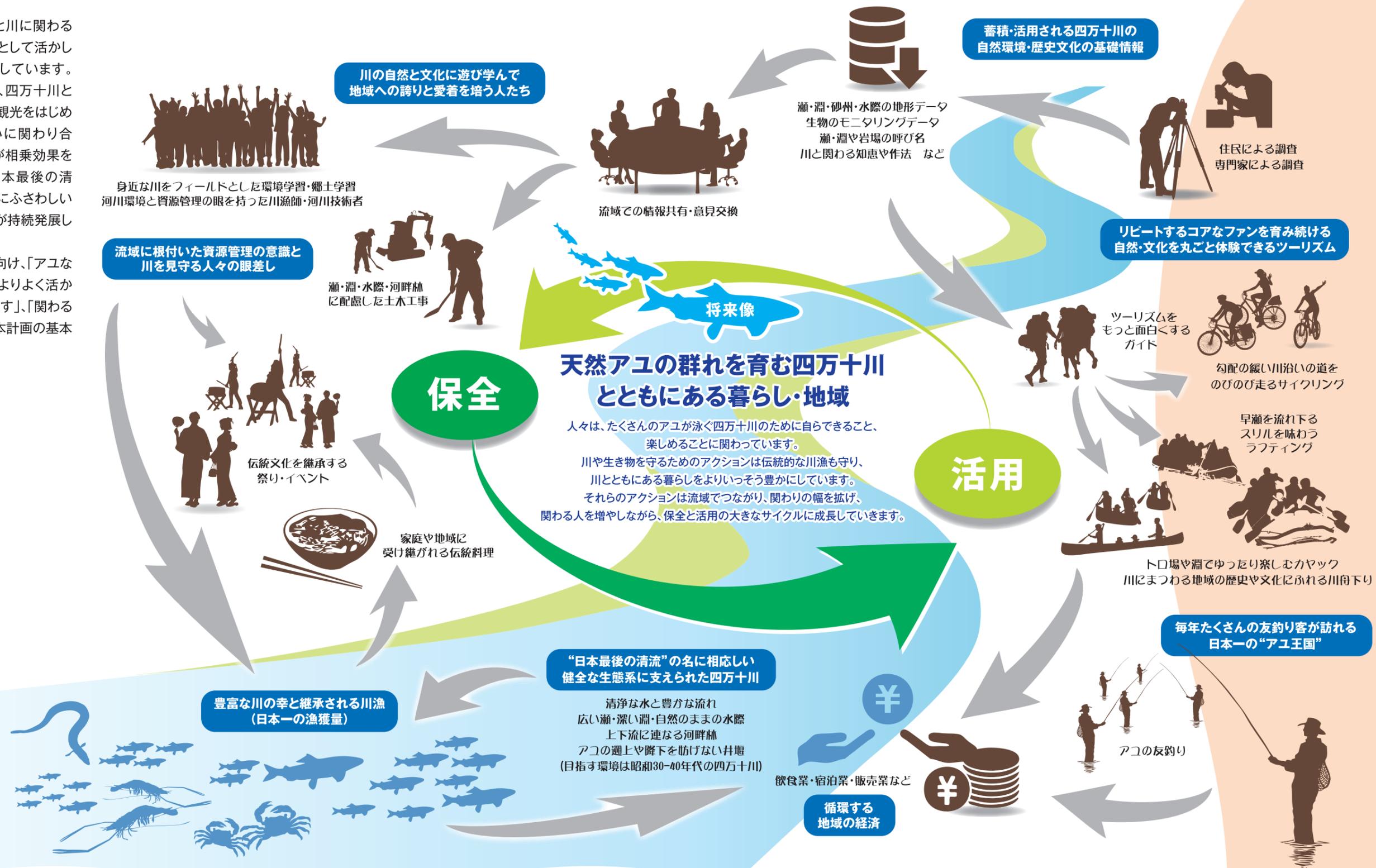


注) 図中の数値は収容可能尾数を100とした時の比率。

このほか、テナガエビ類やモクスガニ(ツガニ)の分布・生息密度調査を行いました。資源が激減している現状を再認識する結果となりました。

将来像と3つの基本方針

右の図は、四万十川と川に関わる暮らし、それらを資源として活かした観光の将来像を示しています。本計画が目指すのは、四万十川と地域の暮らし、そして観光をはじめとする各産業が互いに関わり合い、「保全」と「活用」が相乗効果を生み出すことで、「日本最後の清流」、「アユ王国」の名にふさわしい四万十川と四万十町が持続発展している姿です。この将来像の実現に向け、「アユなどの水産資源と川をよりよく活かす」、「天然アユを増やす」、「関わる人を育てる」の3つを本計画の基本方針とします。



1 アユなどの水産資源と川をよりよく活かす

- アユをはじめとする四万十川の水産資源と地域をつなぐ仕組みをつくりブランド化を図るなど、地域の経済循環を後押しします。
- 釣りや自然体験などのフィールドとしての川の利用価値を高め、河川利用を活発化させます。
- 川と関わる暮らしと文化の継承を促し、地域への誇りと愛着を育てていきます。

2 天然アユを増やす

- 四万十川のアユ資源量増加のために流域および関係主体が連携し、ソフト・ハード両面から対策を講じます。
- 資源量の増加とともに、うるかなどをおいしく食せる質の高いアユが育つよう、広く河川環境の改善を図ります。

3 関わる人を育てる

- 水産資源の回復、環境改善、文化継承など、四万十川を活かした地域振興を支える人材を確保・育成していきます。
- 四万十川の保全と活用に向けて、より多くの住民、多様な主体による議論の場づくりに努め、流域連携の機運を高めます。

18の施策と具体的な取組

基本方針	施策	取組		
① アユなどの水産資源と川をよりよく活かす	経済循環につながるアユなどの水産資源の活用	01 アユをはじめとする水産物の提供サービスの拡充 消費地の需要に応じたアユの出荷体制の強化 いつ来ても町内で天然の川の幸・伝統料理が食べられる環境整備		
		02 水産物利用の拡大 学校給食への川の幸・伝統料理の導入 コイ・ナマズなどの食材利用を含めた活用の検討		
		03 四万十アユのブランド化 四万十アユのブランド確立(より高い付加価値) 歴史文化で付加価値を高めた川の幸などの商品開発 アユ・ウナギ以外の水産資源の利用促進・ブランド化 通販・ネット販売のチャンネル拡大(全国に四万十川の幸が流通することでブランド力強化を後押し)		
	利用価値を高める川のフィールド利用	04 釣りや川での体験・アクティビティの拡充 シーズン中のマンパワー確保の仕組みづくり オフシーズン・雨天時の観光メニュー開発 水辺および既存施設の活用に向けた再整備		
		05 受入れ態勢の整備促進 宿泊の受入人数拡大に向けた検討		
	文化継承につながる活動の存続・発展	06 伝統ある祭り・イベントや漁などの継承 継承の要となる若い世代の確保 地域へのマンパワーの供給 友釣りイベントの導入		
		07 文化的景観の活用促進 アユ火振り漁の見学ツアー 文化的景観の構成要素についての勉強会 文化的景観を活かしたエコツアー		
		08 地域資源の活用・連携による新たな価値の創出 川の瀬・淵・岩場などの名前・いわれの保存・活用 川沿いの集落や流域に展開する遊び・学びのルートづくり		
	天然アユの資源回復	09 親魚の保全による資源の底上げ(漁獲圧の適正化)と保護策 天然アユの遡上尾数の目標設定 漁獲圧の高い漁法に対する制限の検討 種苗放流と有害鳥獣の駆除		
		10 継続的な調査活動と流域間の連携 専門機関の協力・支援を活かした科学的・定量的な調査の継続 アユ資源の保護意識の共有・保護活動の実践に向けた流域連携の呼び掛け		
	② 天然アユを増やす	天然アユの資源回復	11 瀬と淵のある河床の保全・再生 河川管理者との連携による河岸・河床地形の保全・再生(護岸・道路擁壁工事等における近自然工法の展開など)	
			12 河川の連続性の確保 アユ遡上性に課題のある魚道の改修 既往の水質調査の継続 生活排水処理施設の導入と適切な維持管理(公共下水道・農業集落排水・四万十川方式など) 高度処理が可能な合併処理浄化槽の普及促進(合併処理浄化槽設置整備事業の継続) 各家庭でできる生活排水対策の普及啓発(水切りネットの使用、使用水の再利用、環境負荷が少ない洗剤等の使用など) 環境保全型農業の推進(化学肥料や農業の低減・畜産堆肥の利用拡大など) 農業濁水に関する汚濁の改善	
		環境の改善	13 水質の維持・向上 生産体制の整備と販路の確保 作業道の整備と河川環境の配慮した森林整備の促進(四万十川流域豊かな森林保全整備事業の継続) 担い手の育成 二ホンジカ対策の推進 河畔林の保全・再生	
			14 森林の保全・再生(公益的機能の維持・向上)	
		③ 関わる人を育てる	地域のためにできることを考える人づくり	15 四万十川を守り活かす人材の確保・育成 分野ごとの人材の掘り起こし 遊び・学びをガイドできる人材の育成(ガイド養成研修など)
				16 子どもたちの学習機会の拡充 四万十川の価値を学ぶ体験学習プログラムの拡充 学んだことを発表する機会の拡充 地域資源を活かして自分にできることを考える機会の拡充
	あらゆる立場の人が語り合える場づくり		17 四万十川に関する情報の一元化と共有 情報提供の窓口の整理(ポータルサイトなど) 基礎情報のデータベース化	
			18 議論の機会・協働の場の創出 シンポジウム開催等の支援 テーマに応じた新たな議論の場の構築	

計画推進に向けて

本計画は四万十町が主体となって進めていきますが、取組の実施にあたっては、町民の皆さん、内水面漁協の方々、四万十川の保全や川を活かした地域づくりに携わる皆さんとの協働・連携を図ります。

四万十町のしくみ

本計画に掲げる施策は、左の表に示したように多分野にまたがっています。その推進にあたっては、四万十町の関係部局による所管事業に加え、「四万十川再生事業推進プロジェクトチーム」を議論の場とし、各課の協働をもって取り組んでいきます。

四万十川再生事業推進プロジェクトチーム



注)課名は2018年度現在

議論の場づくり

取組の実施においては様々な主体間の協力・連携が欠かせず、漁業権や水利権などの利害関係を超えて課題に向き合い、一つひとつ解決していく姿勢が求められます。また、あらゆる分野で人手不足が深刻化するなか、情報とマンパワーの共有も重要です。これらを踏まえた体制づくりとして、「四万十川保全活用推進協議会」(仮称)の立ち上げを検討します。さらに、流域の団体組織と本計画の「将来像」を共有し、それぞれの立場で協働していけるよう、緩やかなネットワークの構築を目指します。

四万十川流域全体の議論の場

ゆるやかにつながり協力し合える人のネットワーク

- *河川管理者(高知県・国)
- *四万十川自然再生協議会
- *全ての内水面漁協
- *流域市町の関係部局など
- *四万十川流域文化的景観連絡協議会
- *NPO法人四万十ART
- *四万十高校など
- *流域市町の関係部局など
- *四万十すみずみツーリズム連絡協議会
- *株式会社四万十ドラマ
- *NPO法人REVERなど



四万十川再生事業推進プロジェクトチーム

計画の期間

本計画の期間は、「第2次 四万十町総合振興計画」と連動して2026年度までとし、2022年度末に中間チェックを行います。計画の進捗状況や社会情勢の変化などによって内容の見直しが必要となった場合は、適宜修正を行います。